

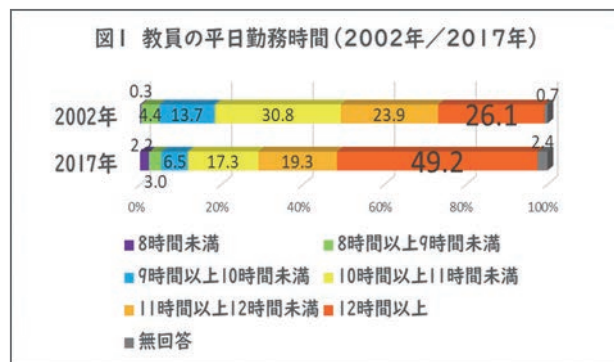
これらの特徴は、相互に強化し合いながら改革の本質を覆い隠してしまう方向で作用してきた。これまでの教育改革研究のほとんどは、こうした3つの限界を孕むアリーナでの語りに過ぎなかったのではないか。厄介なのは、実践者や研究者の思考を特定の方に流し込んでしまう「磁場」が形成されてしまうことである。もし教育社会学に存在理由があるとすれば、その「磁場」の働きに無批判に加担するのではなく、これらの限界を可能な限り洞察していくことではないだろうか。

人間は〈いのち〉として「地球のリズムや条件」に枠づけながら生きる定めを負っている。だれにも「羅針盤」(＝他者といっしょに生きていく主体として身体化された道具)が与えられているが、当の人間が作った「磁場」(＝権力が捏造する偽りの社会)は大きく歪み、私たちの本来的な生を毀損せずにはおかない。人間らしい時間の流れの中でお互いをよく知る努力をし、場をつむぎながら日常を丁寧に生きようとする市井の人々を気づかぬうちに狂わせてしまう。私が国の研究機関に勤め始めて早々に感じたのは、教育政策のつくられ方への違和感であり、官僚主義や父権主義(パターナリズム)に飼い馴らされることの危うさだった。「磁場」に共振しそうになった「羅針盤」を回復させる上で、切実さを抱えつつフリースペースに集う方々や独自の高校づくりを粘り強く続けられられている方々と出遇い、学ばせていただいた。自分自身がゆさぶられてはじめて、この権力性を持った「磁場」それ自体に問題があると問い直すことが辛うじてできたのかもしれない。

「教職の危機」の本質とは？

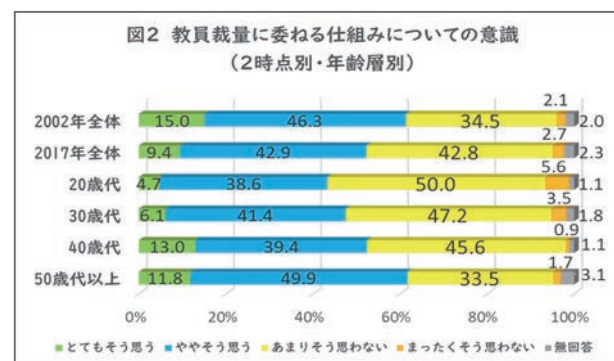
2017年に再び全国中学校校長・教員調査を実施し、蒐集されたデータからは、3つの事実が浮かび上がった。⁽³⁾

第1に、多忙化の厳しい現実である(図1)。平日の勤務時間が12時間超(過労死水準)の割合が2002年の約2倍に達し、とくに若年教員ほど部活動を中心に長時間勤務が常態化している。中教審でもようやくこの問題に真面目に取り組まれるようになったものの、多忙化の2大要因のひとつ、一般事務(＝行政機関から依頼される報告書・書類作成などの「間接業務」)の削減についてはほとんど言及されない。



注) 高校の場合、「12時間以上」のカテゴリーが占める割合は、中学校のおよそ半分であるが、それでも2004年から2015年の10余年で急増している(15.6%→23.2%)。

第2に、脱自律性(＝学習された無力感)のさらなる傾向である(図2)。加えて重要なのは、この脱自律性の傾向が若手教員でより顕著になっていることである(「教育政策」への評価については、若手教員ほど保守的・能力主義的であり、2015年の高校校長・教員調査でも同様の傾向が確認された)。



注) 「個々の教師を信頼してもっと教師の自主性に任せる仕組みに変えるべきである」という項目への回答。

第3に、「教育改革」についての自由記述欄に記された内容を質的に分析した結果、関係性の問題として洞察し教育改革の本質を看破し言葉にするような記述が大幅に減少しているという顕著な変化が浮き彫りになった。厳しい現実を前に「多忙化」への対応を求める言葉へと収斂されてしまい、「磁場」そのものの深刻さが一層増す中で、不条理さを問うという思考そのものが阻害されてきているのである。

ここでいう「磁場」は、教育政策形成の「プラットフォーム」(パソコンで言えばOSのようなものであるが、技術的合理性はない)と言い換えてもよいかもしれない。この「磁場」は、「声の複数性」が受け容れられない設計となっている(パブコメで「磁場」の前提を崩さない方向で意見を拾うことはあっても)。具体的にリアルな関係性の中から互いに学びを深め変容しつつ、新たな関係性が再構築される可能性も巧妙に閉じ